



「二条家文書」

安政6年(1859)4月8日

左近衛府移(写)

学生の皆さん、入学・進級おめでとうございます。教職員の方々でも、今年度から本学に着任したり、学内での所属に変更があった場合が少なくないと思います。新天地で希望に満ちている人もいるでしょうが、新しい環境で不安が尽きないという人も多いはず。入学式や歓迎会は、そうした人たちをチームに迎え入れる意味があると思いますが、実は平安時代にもこれに類する儀式がありました。

今回展示している「左近衛府移」(写)は、安政6年(1859)年3月27日に左近衛大将(左近衛府の長官)に着任した二条齊敏(1816-1878:藤原氏最後の摂政)が、自らの「着陣儀」で用いた二種類の文書の一つを書写したものです。着陣儀とは、近衛府における仕事始めの儀式で、この儀式を行ってはじめに組織の構成員と認められました。

はじめの仕事ですから、不慣れで当然。しかし、栄えある左近衛大将(大臣に次いで名誉あるポスト)の着陣儀ですから失敗は許されませんし、かといって、しょうもない仕事では格好がつかない…。そこで大將着陣儀では、左近衛府スタッフの着陣儀前夜における宿直状況を大將が上司として確認した文書(①)と、近衛府スタッフに支給する米(大粮米という)の受け取りを主計寮(朝廷内の財政管理部署)に報告する文書(②)を発給する仕事が、無難かつ威厳あるものとして選ばれ、12世紀頃には儀式の次第が固定化しました。少し補足すると、①の文書は「日奏」といい、左近衛府のスタッフに対する〈人の掌握〉を象徴し、②の文書は「納畢移」といい、左近衛府に属する〈物の掌握〉(財政管理)を象徴します(「移」は古文書の様式の一つで、上下関係のない組織間で使われました)。そして、①・②の文書の発給をもって、近衛府大将が長官として府を掌握したことが示されたわけです。

もうお気づきかもしれませんが、このうち②の文書の写にあたるのが、この「左近衛府移」で、実は唯一の現存例です。そして驚くべきは、これが幕末の文書であるということ。先に触れたように、大將着陣儀で「日奏」と「納畢移」の使用が定着したのは12世紀ですから、それから700年近く継承されたこととなります(「納畢移」の文面も、12世紀と19世紀で変わっていません)。しかも、本文書には、近江国から左近衛府に大粮米が納入されたことが記されていますが、12世紀頃までとは違い、その実態は、幕末にはありません。12世紀には新しく大将に就任した人物が難なくこなせ、かつ威厳のある業務として選ばれた二種類の文書(①・②)の発給は、その後、〈先例にかなう象徴的な儀礼〉(これを吉書儀礼といいます)として、実態と大きく乖離してなお、宮廷社会で連綿と受け継がれました。

では、こうした先例と儀礼の力を、私たちはどう評価すべきか? 歴史学が抱える難問の一つです。

参考文献:吉江崇「大將着陣儀と大粮納畢移」『日本古代宮廷社会の儀礼と天皇』塙書房、2018年

※附属図書館で展示しています。

執筆者:中村 翼(社会科学科 准教授/教育資料館 次長)